

NPOが持っているノウハウを地域に還元

特定非営利活動法人 京都映画倶楽部
副理事長兼事務局長 矢田 精治さん
理事 事務局長代理 藤田 宗次さん



地域の特徴をよく理解し、地域が持つ伝統と京都映画倶楽部が持つ映像・映画に関するノウハウの双方を活かして持続性のあるイベントができればいいなっています。(矢田さん&藤田さん)

特定非営利活動法人京都映画倶楽部は、日本映画発祥の地京都で、「日本映画」再生と復興を図るために、①伝統ある映画文化資産の保存・継承・管理、各種映画映像の作成活動、②講座の実施を通じた人材育成、③映画・映像・演劇等の関連イベントの開催、④京都文化の映像発信活動などを行っています。

今回は、日本の文化の一つである「映画」を題材に、自治会・町内会・商店街等の地域と連携してイベント等を実施している団体の事例として紹介します。

■具体的な地域との連携実績■



まず、具体的な連携事業として、2008年に実施した「立誠キネマフェスタ京都」があります。元々は京都市と立誠・文化のまちづくりプロジェクト運営委員会からの依頼でした。会場となった立誠小学校は、1993年に閉校し、その後は自治会行事などに使用されていましたが、実は日本で初めて映画が試写実験された場所で、日本映画の原点とされています。

そこで、初めて試写実験された年から100周年を迎えたことを記念して、映画にまつわるイベントができないかと京都映画倶楽部に依頼がありました。

最初の呼びかけは京都市からでしたが、実際にイベントを開催するにあたって、立誠自治連合会も協力してくださり、それから立誠自治連合会とのつながりも生まれ、現在でも関係が続いています。

今でこそ立誠小学校を会場として様々な上映会が実施されていますが、当時は上映のための道具も何もなく、立誠小学校自体とても歴史的価値のある建物なので、京都映画倶楽部で勝手に釘を打ったりすることはできず、またどこに何が置いてあるかもわかりませんでした。そんな中、会場設営などの準備は自治連合会が担当し、上映機材は京都映画倶楽部が段取りを付けるなど、お互いの利点を生かして協力体制を構築していきました。また、北野商店街振興組合との協働では、特撮映画の上映とワークショップを中心に、日本映画の良さを次の世紀に継承・発展させるた



めに若い世代を育み、京都の新しい映画力、映像力を未来につなぐ活動として「ヤングシネマサマーフェスタ'08 SFXワールド」を実施しました。その他にも地域の要望に応える形で、「映画」を題材に様々な連携事業を展開されています。

「立誠キネマフェスタ京都」は、たくさんの来場者があり、結果的に3年間続きました。京都市の予算がなくなった後も、継続的にやってほしいという声があり、開催に向けて自治連合会も協力してくださっていますが、現在資金集めが課題のようです。

■地域の伝統への理解と配慮は欠かせません■

大映通り商店街と連携して、地域の活性化に貢献したいと思い、「太秦・シネマウォーク」という企画をしようと商店街振興組合に持ちかけましたが、なかなかうまくいかないこともあったそうです。現在は組合も快く協力してくださっていますが、当初は「NPOって何？」と理解してもらえないこともありました。

現在はNPOの概念や認知度も高まりましたが、設立当初はやはり理解していただくことに苦労されたようです。

「京都映画倶楽部が地域になり代わってやっていくなんてことはできませんからね。何十年も商店街の活性化のために取り組んできたという自負も伝統もある方々ばかりが集まっているんですから、地域でやるならばそういうところにも気を配ることも大切です。」そう語る矢田さん。そのためにも地域のリーダーのコンセンサスをどう得られるかが重要です。



■今まで培ってきたノウハウの有効活用■

京都映画倶楽部の事例は、NPOが持っているノウハウを様々な地域の活性化のために活用している事例です。新しいものを創り上げていくということも大切ですが、一方で今持っている技術や経験を、それぞれの地域に合った形で最大限活用していく事もとても大切です。

「地域の特徴をよく理解し、地域が持つ伝統と京都映画倶楽部が持つ映像・映画に関するノウハウの双方を活かして持続性のあるイベントができればいいなと思います。」と藤田さん。

また、時代劇も少なくなり、デジタル化が進んだことで、技術の継承も課題とのこと。今なら定年退職された技術屋さんも健在です。技術や文化がすたれてしまう前に、技術を持っている人を地域につないでいく。これからの京都映画倶楽部の地域との連携による活動の広がりが楽しみです。